白鷗大学教育学部論集
2016, 10(２), 417－431

ノート・資料

読書と教育活動の相互作用

── 読書フォーラムを中心に ──

竹長吉正[1]

１　はじめに

ここでは全４回の読書フォーラムについて報告するとともに、このフォーラムが教育関係者（小学校・中学校の現職教員及び教員志望の学生、教員養成の大学教員）にとって極めて重要な研究・研修の場であったことを報告する。

２　第１回白鷗大学読書フォーラムの報告

第１回読書フォーラムは、2013年（平成25年）12月21日㈯、白鷗大学東キャンパスの601、603教室で開催された。（午前９時から601教室、午後１時から603教室）

これは読書の大切さを知ってもらおうとして、教育関係者のみならず、一般市民にも呼び掛けて行われた。

今やデジタルな文化が大きな力をもって私たちの生活に入り込んでいるが、そうしたデジタルな文化と共存しながら、紙の文化である「書物」とどう向き合っていくのか、子どもから大人までの発達の筋道を考えつつ、

---

[1] 白鷗大学教育学部

これからの読書スタイル、読書と生活のかかわり、それから、教育現場で行われている「読書のすすめ」の実態など、様々なリポートを聞きながら、読書への関心を深めようとする催しであった。

以下は、事務局及びコーディネーターを担当した、わたくしの報告である。

第１部は、白鷗大学３年生による「読書体験の発表」。４名の学生（佐藤和貴、藤井めぐみ、樋口敬、佐藤真美）がそれぞれ、自分自身の読書体験を発表した。事前に原稿の準備は行っていたが、リハーサルは行っていない。誰でもみんなの前で発表するというのは緊張するものである。一つ一つ言葉を選びながら、自分の思いや願いを発表するのは、教師を目指す学生にとって、とてもよい刺激的経験となった。

第２部は、読書指導に関する「研究発表」。１名の学生（４年生）と３人の現職教員が発表した。

以下、第２部についての詳細な報告を行う。

第２部は、読書に関する「研究発表」。１名の学生（４年生）と３人の現職教員が発表した。

学生（原　円香（まどか）、４年生）は、卒業研究の一部を発表した。タイトルは「学校図書館を活用した学習活動」。学校図書館を小学校の学習活動にどう活かすかという問題である。フィールドワークとして、栃木県の小学校で学校図書館支援員をされている方（２名）に取材し、その取材内容をもとに自分自身の考察を加えるというものである。学校図書館の活動は大切なものである。子どもたちの日々の学習活動を支える支援員の働き、また、図書委員となった児童たちのいろんな活動も報告した。学校図書館支援員、図書委員の児童、彼らの仕事は目立たないけれども、重要な仕事であることがよくわかる発表だった。

現職教員３名の発表は次の通りである。

深町真子（まさこ）教諭（埼玉県羽生市立井泉小学校勤務）の発表タイトルは「様々な種類の本を楽しんで読むことができる児童の育成」。小学１年生に国語の

説明文教材「だれが、たべたのでしょう」を読ませながら、同時に「動物の食べあとに関する本」数冊を並行読書させるというものである。付箋紙を上手に活用し、個人学習・グループ学習・一斉学習というふうに学習形態を変化させながら、子どもたちに「楽しんで読む」学習を実践した。説明文を読解するだけでなく、読書の力をつけていくという発表であった。

郷間裕之教諭（宇都宮市立錦小学校勤務）の発表タイトルは「子どもの意欲を高めるための読書指導の工夫」。郷間教諭の勤務校では「特色のある学校づくり」の一環として「ふれあい読書活動」を推進している。当初、アンケートを取ったところ、クラスの32％の子どもが読書活動に否定的な気持ちを持っていることが分かった。すなわち、「読書があまり好きでない」子どもが多かった。理由は、「読書より遊ぶほうが楽しい」「字を読むのがめんどうくさい」「読みたい本がない」「文字を読むのが難しい」など。そこで、学校あげて、次のことに取り組んだ。①読書タイム（毎週金曜日、朝の15分間、教室で本を読む）②ふれあい読書会（教職員による読み語り）、③家読（いえどく）（毎週土曜日、家族で一緒に本を読む）④ブックカバー作り、⑤ガイドブック作り、⑥物語作り、など。このようなことを行った結果、次のような成果が見られた。「〈１〉本に親しもうとする児童が増えた。〈２〉図書室へ自主的に行く児童が増えた。〈３〉友人と本の貸し借りを通しての交流が増えた。〈４〉朝の会の１分間スピーチで、本を紹介する児童が増えた。」このような成果が得られたのは、学校全体で「読書活動の推進」に取り組んだからだと言える。

山中勇夫（いさお）教諭（宇都宮大学教育学部附属小学校勤務）の発表タイトルは「不自然な読書で鍛える」。これは何とも意外な発表タイトルであるが、国立大学の附属小学校ならではの実践と言えるユニークなものであった。山中教諭はまず、「子どもの読書の目を開く」という提案を行った。それは、「自分の好きな本ばかりを読み、読書の幅が広がらない子ども」「読書はしているのだが、読書の本当の楽しさを知らない子ども」「ジャンルに応じた本の読み方を知らない子ども」、このような子どもたちの目を開くため

の実践であった。世の中には「読書が嫌い」「本をほとんど読まない」「本を見るのも嫌だ」という子どもたちがいる一方で、このような実践を行うのは、国立大学附属小学校の子どもたちはそのほとんどが、ある程度の読書は行っているので、さらに一段、その上を目指しての指導であると言える。それでは、どのような実践であるかというと、例えば１年生の、国語教科書の説明文教材（「のりものくらべ」）の学習では、教科書の文章と並行して、他の図書（例えば乗り物図鑑）の文章を提示し、その文章の記述の仕方を比べさせるというものである。教科書の文章は、乗り物の「装備→役目」「役目→装備」など記述の仕方が整然としているが、一般の図鑑では、そのような整然とした記述の仕方は取っていない。そこで、一般の図鑑では、どこに装備のことが書かれ、どこに役目のことが書かれているのかを、自分で考えて見つけることになる。このような、教科書教材との並行読書による「読みの技術」習得の応用学習が、山中教諭の言う、いわゆる不自然な読書である。

わたくしは、山中教諭の発表を聞いて、確かに教科書の説明文だけで読み方を教えていたのでは、子どもたちの生活に生きる「読み方・読ませ方」の指導にはならないのだと強く感じた。

４名の研究発表は、今回の読書フォーラムに大きな問題と示唆を提起するとともに、学校における、また、図書館における今後の読書活動の推進に大きく寄与するものであった。

しかし、課題もある。

その一つは、参加者のことである。今回は50名を超えることができなかった。今後は、フォーラムへの参加者を増やすよう、努力したいと思う。

また、デジタル図書（電子書籍）利用の報告がなかった。今後は、この面からの報告を期待したい。

フォーラムの最後は前之園（まえのその）幸一郎氏（青山学院女子短期大学名誉教授）による講演である。講演のタイトルは、「イタリアにおける優しさの伝統と『ピノッキオ』」。前之園氏は『ピノッキオ』の我が国への移植の話から

始められた。

１．ウォルト･ディズニー版『ピノキオ』（1940年にアニメ映画）の特質

２．障害者差別図書の問題（1976年）＊『ピノッキオ』が差別図書として抗議を受け糾弾される。

３．『ちびくろサンボ』の差別図書問題（1989年）

このような時期（ある意味では「受難」とも言える時期）についての説明をした後、『ピノッキオ』が提起する今日的問題に言及した。

１．「いのち」の誕生をめぐって

２．父親からの逃走と、獲得された「自由」の中身

３．操り人形と「目に見えない糸」

４．運命の激変

そして、何といっても圧巻は、様々な挿絵から見る『ピノッキオ』物語の展開についての説明であった。

１．死と再生

２．間抜（まぬ）け落としの国

３．働き蜂の国

４．おもちゃの国

５．人間へ

パワーポイントを駆使されて、イタリア語版『ピノッキオ』の挿絵を昔（初版）から今日に至るまで、様々なものを提示された。

文字通り、あっという間の２時間だった。

我が国でよく知られているディズニー版『ピノキオ』は、太平洋戦争後の暗い時代に、主題歌「星に願いを」のメロディーとともに、ある役割を果たした。しかし、その反面、原作の『ピノッキオ』（作・コッローディ）の深遠な中身は、忘れ去られたように思う。日本の特に若い人々には、この作品の持つ、「操り人形が人として生まれ変わる」という主旋律が、そもそも、どういうことなのかを考えてもらいたい。そして、ぜひ、原作の

『ピノッキオ』を読み、考えてもらいたい。前之園氏の講演を聞きながら、そう思った。ディズニー版『ピノキオ』と原作の『ピノッキオ』は、一部つながるところもあるが、大半はつながらない、別の作品だと思う。どちらの作品が好い悪いということではなく、どちらの作品も楽しみながら、その味わいの違いを知ってもらえたらと思った。

3　第２回白鷗大学読書フォーラムの報告

2014年（平成26）12月20日㈯、白鷗大学東キャンパスで第２回読書フォーラムが開かれた。午前10時から午後４時まで、熱気あふれる中味で、参加した人々からは「来年もまた開いてください」という声が多数寄せられた。以下、第２回読書フォーラムの内容を詳しく紹介する。

午前中は大きく二つの発表があった（会場は501教室）。一つは大学３年生４名による読書体験の発表。読書体験は一人一人によって異なる。また、読んだ本も違う。しかし、各自がそれぞれ自分の思いや願いを本や読書に重ねて語るところに、聞く人を感動させるものがあった。いわゆる、「ブックトーク」の醍醐味である。わたくしは聞いていて、今の大学生がこれまで読んできた本というのがわたくしの読んできた本と違うのに驚くと同時に、学ぶものもあった。現代という時代を知るためには今出ている本も読まなければならないし、また、今出ていない過去の本も読む必要があると、改めて感じた。

午前中のもう一つの発表は、大学４年生３名による研究発表。岸田國士（くにお）の戯曲（近代劇）をコラージュしてよみがえらせている日本人作家ケラリーノ・サンドロヴィッチの再構成劇について石村奈緒子は、その基になった岸田の戯曲「紙風船」「犬は鎖に繋（つな）ぐべからず」などの作品的価値を検証した。また、千葉県の小学校で教育実習を行った山田朱理（あかり）は、ゆるキャラを教育に活かす方法を提案した。もちろん、その前提として、「キャラクター」や「ゆるキャラ」についての歴史や定義を明らかにした。現代文化

と教育活動との結びつきを強調した、印象度の強い発表だった。

午前中最後の発表は佐藤真美（まみ）による、教科書教材として多く採用されているアーノルド・ローベル作品についての研究。「おてがみ」「おちば」「はやくめをだせ」「そこのかどまで」など、これらの作品はかえるくん、がまくんという二人の主要人物が事件を展開する『ふたりはともだち』『ふたりはいつも』『ふたりはいっしょ』などの絵本がもとになっている。教科書に採られているのは、ある限られたわずかの作品だが、そこからどのようにして他の作品に広げていくかが、教育の場では重要になってくる。同じ作家の他の作品、あるいは、手紙というものを題材（話題）やテーマにした他の作家の作品などへ広げていくといった、教科書教材から本へという読み広げが読書指導の展開である。佐藤の発表は、国語教科書教材からの発展としての読書について、問題意識を喚起する発表であった。

午後は現職教員二人の研究発表と、宮川健郎氏の講演があった（会場は502教室）。

鈴木美紀教諭（栃木市立大平南小学校勤務）の発表は、「読書を楽しもうとする態度を育成するための学習指導の工夫」で、主に小学４年生の児童（24名）に「ごんぎつね」を読み取る指導を中心にしたもの。「ごんぎつね」は教科書教材としては長篇だが、その実践を「⑴音読　⑵叙述に即した読み　⑶感想を伝え合う活動　⑷読書活動」の４つの観点からまとめ、報告した。「ごんぎつね」を学習した時期が全国読書週間と重なり、児童も教員も読書に力を入れた。教室に新美南吉の著書や「きつねの本」（狐が登場する物語の本）を置いたコーナーを作ったりした。他に、「読書感想画の展示」「先生のお薦め本の紹介」「多読者の表彰」「読書クイズ」等も行った。

宇賀神　基（はじめ）教諭（宇都宮大学教育学部附属小学校）の発表は、「読書好きの子どもを育てるために —— 単元を貫く言語活動を通して ——」ということで、具体的には「おとうとねずみ　チロ」（小学１年教材）「注文の多い料理店」（小学５年教材）の実践を報告した。

前者の作品では「物語の一番好きな場面を紹介し合う」、後者の作品で

は「作品がもっている謎について考える」ということで、児童が自分の読み（感想など）を友だちと交流することに指導の力点を置いている、ということだった。自分の読み（感想など）を友だちと交流することで読書好きの子どもを育てるという目標が低学年から高学年まで一貫していて、聴衆に深い感動を与えた。

宮川健郎氏（武蔵野大学教育学部教授）は日本児童文学の歴史と現在を、平明に解説した。「声」の時代というのは、即ち、「近代童話」の時代であり、詩的・象徴的なことばで作家が自分自身の心象風景（心の中の景色）を描くという「童話」の時代だった。そして、次の時代はそのような「声」とわかれて「現代児童文学」を誕生させた。「現代児童文学」は散文的なことばで、子どもをめぐる社会的状況（いわば社会の種々相）を描くものである。

そのような変化、つまり、「近代童話」から「現代児童文学」へという変化の中で、「声」というもの、すなわち、語り手の「声」というものが失われた。そこで、「声」というものを復権させる試みが必要であり、じっさい、そのような試みを行っている作品が2005年以降、現れてきていると宮川氏は指摘し、具体的に『すみれちゃん』（石井睦美　2005年）『ひらけ！なんきんまめ』（竹下文子　2008年）『きのうの夜、おとうさんがおそく帰った、そのわけは……』（市川宣子（のぶこ）　2010年）『願いのかなうまがり角』（岡田淳　2012年）等の作品をあげた。

フォーラムの参加者は、小学校の教育現場で行われている読書指導の実態を知ることができ、たいへん有意義であった。

また、日本の児童文学の歴史と現在の児童読み物の状況を知ることができ、たいそう参考になった。

４　第３回白鷗大学読書フォーラムの報告

2015年（平成27年）12月19日㈯、第３回白鷗大学読書フォーラムが大学

の東キャンパス507,503教室で開催された（午前10時から507教室、午後１時からは503教室）。

午前には、学生による読書体験の発表（３年生４名）と、卒業研究の中間発表（４年生２名）があった。

読書体験の発表　　大和昂弘､片寄佑美､両方泰菜､伊崎佐永子（４人）
卒業研究の中間発表
　１）絵本が子どもに与える影響　　小曽根汐里
　２）国語教育における発達障害の困難とその指導法　秋山　雅

午後には、学生１名と現職教員２名による研究発表があった。

３）国語科による読書指導　── 複数教材を使った授業展開 ──
　秀野友香里（白鷗大学４年）
４）自分の思いや考えをもち、伝え合い、共に学びあう子の育成
　── 国語科の学習を通して ──
　柏木美紀（栃木県栃木市立大平南小学校教諭）
５）国語の授業を通して読書好きな子どもを育てる
　宇賀神　基（はじめ）（宇都宮大学教育学部附属小学校教諭）

そして、次の講演があった。

演題　　現在の日本の児童文学と作家たち
講師　　高橋　秀雄（児童文学作家、栃木県在住）

参加者の声は次のとおりである。

Ａ）学生（秀野（しゅうの）さん）による研究発表について

① 昔、本が好きでなかったが、ある本との出会いによって本が好きになったということに共感した。（３年　HN）

② 読書をする習慣（自ら本と向き合うことの習慣）をつけることの難しさと大切さを実感しました。今、子どもたちの文字離れが多くなっていると聞くので、文字離れをしないようにしていくことを心がけたいと思います。（３年　UT）

③ 複数の文章を比べ読みすることの良い点を学ぶことができました。（２年　IM）

B）柏木先生の研究発表について

① 実際の教育現場で行われている授業実践を聞くことができて、自分が実際に国語の授業をすることの見通しが持てた。（３年　HY）

② ３，４年生になると読書をする児童が減るということを聞き、驚きました。また、掲示物を使って読書意欲を高める指導法は参考になりました。（２年　UA）

③ 子どもの発言に対してどう切り返すかという、実践的なことが聞けて面白かったです。（２年　IM）

C）宇賀神先生の研究発表について

① 参加型読み聞かせの大切さ、また、読み聞かせが子どもに与える影響を改めて強く感じました。（３年　NM）

② 絵本を通して国語の授業につなげる単元構成が、とても参考になりました。（３年　MM）

③ 私も「すごいぞ動物ブック」絵本の読み聞かせをやって、子どもたちに本好きになってもらえるようにしたい。（２年　AM）

D）高橋先生の講演について

① 作家の生の声による本の朗読は初め聞きました。取り上げていた本

をぜひ読んでみたい。（３年　KH）

② 本はどのようにして出来上がるのか、また、どのように批評されるのか、作家の生の声を聴くことができて貴重だった。（３年　FA）

③ 教科書に載った作品は文学じゃないという言葉が印象に残りました。確かにそうだなと思いました。作家ならではの視点からのお話が聞けて良かった。（３年　KH）

他にもいろいろな感想や意見があった。

今回の参加者は78名であった。

また、高橋先生の講演内容は次のとおりである。但し、要点を列記した。

［１］ 今の子どもたちは日本昔話に触れる機会が少ない。例えば、「桃太郎」とか「花咲爺さん」とか。地味だけれど、このような昔話は、読み聞かせをすると、子どもたちの反応が好い。自分は「読み聞かせ」というよりも「読み語り」と言っているが、内田麟太郎の「読み語り」は、子どもたちの反応がたいへん好い。

［２］ 今、日本の絵本はヨーロッパにまで進出している。ヨーロッパで話題になり人気が出たというので、日本に「送り返される」という奇妙な現象が起こっている。日本の子どもの本自体が、すごいことになっている。

［３］ 栃木県では子どもの本に対する認識度は、まだまだ低い。子どもの本の出版は、たいてい自費出版だと思っている人が多い。

［４］ 本はどうやって出版されるのかということを知らない人が多い。また、印税ということを知らない人が多い。本を出すには公募に作品を出すか、出版社に原稿を持ち込むか、あるいは児童文学の講座や教室で出版社の人と知り合いになるかである。宴会や何かで知り合うという気楽な感じがないわけではない。ともかく、出会いである。

全国に児童文学の同人雑誌がたくさんあり、自分の所属している同人雑誌『季節風』は大きなものだ。その代表は、あさのあつこである。あさのは皆さんも知っているように作品『バッテリー』で有名になった作家である。

［5］ 『季節風』は50社ほどの出版社に送っているから、すぐれた作品だと出版社の方から本を出さないかと話が来る。また、絵本だと、画家は個展を開き、その案内状を出版社に送る。編集者がやって来て、いい作品だと本にしたいという話が出る。このようにして編集者は、良い書き手（また、描き手）を探しているのである。

［6］ 出版社は自費出版を、原則行わない。なぜなら、会社の名前に傷がつくから。良い作品、すぐれた作品を出すことが編集者の仕事であるからだ。例えば講談社の児童文学新人賞を取った書き手には、編集者が一人つく。そして、書き手と二人三脚で育てていくのである。

［7］ 新人賞などに応募する際の原稿の書き方であるが、それはごく普通の書き方である。分かち書きはしないし、難しい漢字を使ってもかまわない。また、特別な読み方でない限り振り仮名はつけない。それは本にするとき、編集者が行う手直し（作業）である。

［8］ 作家になるために、どこで勉強するかであるが、それは先ほど述べた同人雑誌の例会に参加してお互いに高め合うことが一番である。他に作家が主催する創作塾や、文学学校、通信添削などがある。

［9］ 現在の児童文学作品は、読者が主人公になりきって生きる、そのような作品だ。つまり、読者に遊んでもらう作品である。

［10］ 「純粋な読書」というものがあれば、また、「教育に加担する読書」というものがある。「教育に加担する読書」とは、別の言葉でいうと、「教育に役立つ読書」である。

　著作権の二次使用というのがある。ある作品が入試に使われると、試験の後で、作者のところへ許可願いが届く。事前に許可を取ろうとすると、問題が漏れる惧れがあるから。

　作品の一部が使用されることの問題もあるが、文学作品がテストや入学試験と結びつくと、ろくなことはない。

　自分の作品が入学試験に使われた作家が、その問題に答えようとしたら、解けなかったということを聞いた。

　例えば皆さん、次のような問題は、どうだろうか。「雪が解けたら何になる？」

「春になる」と答える人もいれば、「水になる」と答える人もいる。どちらも正解である。しかし、試験では答えを一つに決めてしまう。「自由な解答」などというものが許されない。

［11］　国語の教科書に載った児童文学の作品は多い。今西祐行「一つの花」、あまんきみこ「白いぼうし」「ちいちゃんのかげおくり」、椋鳩十「大造じいさんとガン」など。これら教科書に載った作品は、もう文学じゃない。テスト問題につながるから。

　今日の子どもの読書と教育をめぐる諸問題について、児童文学作家の立場から鋭い指摘を行い、聴衆に深い感銘を与えた。

5　第４回白鷗大学読書フォーラムの報告

　第４回白鷗大学読書フォーラムは、2016年（平成28年）12月17日㈯、東キャンパスで開催。プログラムは次のとおり。

テーマ：読書と学校での学び

場所　白鷗大学東キャンパス　601教室（＊午後１時からは603教室で）
９：00～10：40　学生による研究発表Ⅰ（５人）601教室
（白鷗大学４年生＊各自、発表15分質疑５分）
10：45～12：05　研究発表Ⅱ（＊４人　＊各自、発表15分質疑５分）

竹長吉正

13：05～14：15　研究発表Ⅲ（＊現職教員２名）603教室で

奥脇　千鶴子（さいたま市立与野南中学校　校長）＊発表30分質疑５分
伊藤　真（川越市立川越小学校　教頭）＊発表30分質疑５分

14：15～14：40
講話「栃木県の国語教育者山本有三の仕事
―― 石井桃子との接点 ――」
竹長　吉正（白鷗大学教育学部教授）

６　終わりに　―― 読書フォーラムの成果と課題 ――

以上、全４回の読書フォーラムを企画・運営して気づいたことを、成果と課題としてまとめると、次のようになる。

①　大学１年生の前期授業（「国語概説Ⅰ」のクラス）で、読書についてのアンケートをとった。「小学生の時は、けっこう本は読みました。しかし、中学の時は部活に追われ、また、高校では受験勉強に追われ、ほとんど本は読みませんでした。」という回答が多くみられた。

教員を志望する学生が、このような状態では、子どもたちに「読書の楽しさ」や「面白さ」を伝えられないと思った。そこで、大学在学中に、再び読書好きになってもらおうと考えて、このフォーラムを計画した。

②　読書指導の方法を知らないという学生が多い。そこで、現職教員を招いて、その方法を伝授してもらおうと考えた。国立大学教育学部の附属小学校と一般の公立小学校中学校とで、それぞれ、どのような実践が行われているのかを、まず知ってもらおう、そういう意図でこのフォーラムを計画した。

③　本のことや、読書指導に詳しい研究者・作家に講演・講義してもらっ

て、最新の知見を学生に伝えてもらおうと考えた。

このような意図に沿って通算４回の読書フォーラムを開催した。その成果は次の参加者の声（学生アンケート回答）に明らかである。

〈１〉 児童が読書好きになるには教師の働きかけが重要だと気付きました。これから教師になったら、掲示物などに気を付けて読書意欲を高める指導を行いたいと思います。（UM）

〈２〉 読書という活動の在り方が自分が小学生だった時と違っていることに気付いた。もう一度、読書について考え直そうと思いました。（KH）

〈３〉 今まで、それほど読書をしてきたほうではありませんが、だからこそ教師になったとき、子どもに読書好きになるような工夫がしたいです。（MT）

〈４〉 絵本の読み聞かせは、これまで先生だけが読むと思っていた。しかし、今日のお話や実演で、私たちも参加できる読み聞かせがあるのを知って、びっくりしました。これからはぜひ、参加型の読み聞かせについて勉強していきたい。（TM）

〈５〉 教師が国語の授業で複数教材を用いることはかえって読書嫌いを作るのではないかと思いましたが、じっさいはそうでなく、読書に関心のない子どもに効果的であるという発表には驚きました。（HN）

このほかにもたくさんの「有意義だった」「勉強になった」「また、開いてほしい」などの回答があった。

［附記］

白鷗大学読書フォーラムは、教育科学研究所の特別事業費の交付を受けて開催した。ここに記して、謝意とする。